



## 👁️👁️ みどころ

憲法9条に守られ平和ボケした日本人には、「企画亡命者」なる言葉が理解不可能。もっとも、それは80～90年代初頭あたりまでかなりの数に上ったが、近年においてはほぼないものとされている。それが、韓国映画史上はじめて、4人の「修羅の獣たち」の1人として登場！

金正恩、張成沢に連なるロイヤルファミリーの一員で、中国にある秘密の銀行口座を知る V.I.P. な企画亡命者は、北朝鮮のみならず韓国でも連続殺人を繰り返すサイコパスだったが、それを追う韓国警察は？また、米CIAと結びつく韓国国家情報院は？さらに、北朝鮮で煮え湯を飲まれた元作業員は？

『V.I.P. 修羅の獣たち』の邦題がピッタリの、スリリングな展開はメチャ面白い。そして、昨今の南北朝鮮の動きとダブらせて考えればさらに興味深いので、難解な部分は勉強しながらしっかり鑑賞したい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ “企画亡命者” とは？なぜタイトルに V.I.P. が？ ■□■

妻殺しの濡れ衣を着せられて死刑を宣告された医師が、警察の追跡を逃れながら真犯人を探し求めて全米を旅する『逃亡者』は、その昔アメリカで大ヒットしたテレビドラマだが、日本でも1964年5月から1967年9月までテレビ放送され、大人気になった。「逃亡者」は誰にでもわかる日本語だが、それに対して「企画亡命者」って一体ナニ？本作は、韓国映画史上はじめて「企画亡命者」を扱った映画だそうだが・・・。

「企画亡命者」は、南北分断国家である韓国の国民にも耳慣れない言葉。ましてや、戦後70年以上平和と安全の下で暮らし、いささか“平和ボケ”している日本人は絶対知ら

ない言葉だ。パンフレットによると、「CIAと国家情報院による企画亡命者」とは、次のとおりだ。

米CIAと韓国の国情院が合同で亡命させた人物として、韓国国内でVIP対応を受ける。冷戦時代だった80～90年代初頭あたりまでかなりの数に上ったが、近年においては、ほぼないものとされている。

他方、「修羅の獣たち」という邦題に「VIP」という“冠”をつけたのは一体なぜ？さらに、英題は『VIP.』だが、それは一体なぜ？それは、本作で北朝鮮からの企画亡命者＝VIPにされた若者キム・グァンイル（イ・ジョンソク）が、「修羅の獣たち」の1人として、本作の一方の主人公とされているためだ。しかし、彼はなぜ「全員から追われる容疑者」に？そして彼のキャラは？

## ■□■4人の“修羅の獣たち”の立場は？キャラは？■□■

本作で「修羅の獣たち」とされている主人公は、合計4人。その1人は前述したように、  
①「全員から追われる容疑者」、キム・グァンイルだが、それに絡む他の3人の“修羅の獣たち”のキャラは次のとおりだ。すなわち、  
②国家情報院の要員で、「隠蔽しようとする者」、パク・ジェヒョク（チャン・ドンゴン）  
③韓国警察の警視で、「捕らえようとする者」、チェ・イド（キム・ミョンミン）  
④北朝鮮工作員で、「復讐しようとする者」、リ・デボム（パク・ヒスン）  
なるほど、なるほど・・・。

また、128分の本作は5つの章に分けて構成されているが、その冒頭にジェヒョクとの打ち合わせ(?)で登場するのが、米CIAの所属要員であるポール・グレイ（ピーター・ストーメア）。しかし、なぜ本作に米CIAの要員が登場するの？それが本作のミソの1つだから、韓国の南北問題に疎い日本人は、そこらあたりにもじっくり注目！

## ■□■あの実名も登場！そのリアルさにビックリ！■□■

『悪魔を見た』(10年)、『シネマ26』(185頁)の脚本を書き、『新しき世界』(13年)、『シネマ32』(266頁)を監督したパク・フンジョンが自ら脚本を書き、監督した本作では、姿こそ見せないものの、金正恩朝鮮労働党委員長や、張成沢元国防委員会副委員長等、近時の“著名人”を実名で登場させているので、それに注目！金正恩委員長は去る6月12日にシンガポールで開催されたトランプ大統領との史上初の米朝首脳会談で笑顔を振りまいていたが、その素顔は不気味なまま・・・。他方、張成沢は、金正日・金正恩体制の“ナンバー2”、甥である金正恩の“後見人的存在”として権勢を誇っていたが、2013年12月に国家転覆陰謀の容疑で全役職を解任され、朝鮮労働党を除名されて刑死してしまったことは周知の通りだ。

しかして、本作では張成沢が活着している間は、その側近で、平安道の党書記をしていたキム・モスルも、彼の中国資金の金庫番として権勢を誇っていたらしい。すると、その息子であるグァンイルを企画亡命者にすることができれば、CIAと韓国は大成功！しかし、張成沢が肅清され殺されてしまうと、当然キム・モスルも同罪だ。そうすると、企画亡命者として韓国に來ている息子のグァンイルの運命は・・・？父親も優秀だったが、自分はそれ以上に優秀だとほざくグァンイルは、中国資金の銀行口座がすべて頭の中に入っていることが自慢のタネだが、その情報の価値も張の命運と連動するのでは・・・？

6月12日の米朝首脳会談後にはトランプ大統領が表明した米韓合同軍事演習の中止と、在韓米軍の削減を巡っては、米、日、韓でいかに「調整」するかが目下の注目点になっているが、そこでは当然米CIAの暗躍も想定されている。そんな現実を見せられている昨今、本作を観れば、そのリアルさにビックリ！

## ■□VIPな企画亡命者のサイコパスぶりに注目！■□

本作のうたい文句は、「韓国ノワールの巨匠——『新しき世界』パク・フンジョン監督が放つ 国家機関の闇に翻弄される男たちの狂宴を描く、壮絶クライム・アクション！」。そして、PRODUCTION NOTEの冒頭には、「キャラクターの熱く感情的な衝突で緊張感が高まる犯罪ドラマ 国家情報院—警察—工員—CIAの息をのむ対立関係！」の文字が躍っている。

本作は4人の“修羅の獣たち”プラスCIAで「秘密を握る者」、ポール・グレイという5人の男たちの物語で、女性はグァンイルからなぶり殺しにされる若い被害者だけしか登場しない。役所広司の「警察じゃけえ、何をしてもええんじゃ」のセリフで有名になった『孤狼の血』(18年)でも胸クツが悪くなるような殺人シーンが登場したが、パク・フンジョン監督が脚本を書いた『悪魔を見た』のモンスターぶりはもっとすごかった。それは本作でも同じだが、何より本作では、へらへら笑いながらとてつもなくエグい犯罪をやったのけるグァンイルのサイコパスぶりがすごい。北朝鮮のロイヤルファミリーの一員ともなれば何でもやり放題なのはわかるが、婦女暴行や殺しの領域でもやり放題というのは如何なもの？もっとも、金正恩の兄貴(金正男)殺しまで公になっている昨今、VIPな企画逃亡者ならこの程度の連続殺人はやむなし・・・？いやいや、そんなことはないはずだ。

本作では、まずはじめて映画に登場したロイヤルファミリーの一員であるグァンイルが、VIPな企画亡命者として韓国に入った後の、あっと驚くサイコパスぶりを、しっかり確認したい。

## ■□管轄は警察？国家情報院？これぞ縦割りの行政の弊害！■□

残忍な殺人事件が起きれば、それを捜査し、犯人を逮捕するのは警察の役目。そんなことは誰にでもわかっている。連続殺人事件を解決できず、その重圧で自殺した前任者に代

わって、チェ・イドは上司から「犯人を捕らえるためなら手段と法を無視するのは当たり前、暴力もいとわない」ことの詳細を取り付けたから、勇気リンリン。そしてグァンイルを有力な容疑者だと目星をつけて猛追し、やっとその身柄を確保したから、万々歳だ。ところが、そこに国家情報院の要員であるパク・ジェヒョクが登場し、「待った！」をかけたからビックリ！ここに、グァンイルの身柄を巡って警察と国家情報院との対立が発生したが、こりゃ一体ナニ？殺人犯逮捕の権限は警察ではないの？そこになぜ国家情報院が・・・？

国家組織がデカくなり複雑になれば、どこの国でも縄張り争い＝縦割り行政の弊害が目立ってくるが、本作に見るイドとジェヒョクの対立は、これぞ韓国の警察と国家情報院の縄張り争い＝縦割り行政の弊害！もちろん、イドはグァンイルがV.I.P.な企画亡命者であることを知らないのだから、縄張り争いもある程度は仕方ないが、グァンイルを巡って国家情報院のジェヒョクが登場し、ことごとく捜査の邪魔をするのは、ひょっとしてそれなりの国家的事情があるのかも？イドにそれくらいの「付度」ができれば、イドとジェヒョク、両者の話し合いによる解決もあり得るのだが・・・。

## ■失脚させられた北朝鮮工作員の執念は？■

韓国映画に登場する北朝鮮の工作員が持つ超人的な戦闘能力や格闘能力は、『シュリ』(99年)、『二重スパイ』(03年) (『シネマ3』74頁)、さらに『サスペクト 哀しき容疑者』(13年) (『シネマ33』235頁) 等を観ればよくわかる。また、女性幹部でも、北朝鮮工作員の強固な意志力は、キム・ギドク監督が脚本を書いた『レッド・ファミリー』(13年) (『シネマ33』227頁) を観ればよくわかる。

しかし、北朝鮮で起きた連続殺人事件の容疑者であるグァンイルを追い詰めたにもかかわらず、ロイヤルファミリーからの圧力によってその報復処置を受け左遷されてしまった平安北道の保安省所属の工作員、リ・デボムの執念は？朝鮮労働党の幹部から言われたように、「強制収容所行き」を免れただけでラッキー。そう思って北朝鮮で静かに余生を送ればデボムも安泰だが、何と彼はその復讐を果たすべく、V.I.P.な企画亡命者になったグァンイルを追って、自分も韓国に脱北すると決めたから、さあ大変だ。

①『依頼人』(11年) (『シネマ29』184頁) では、腕利きの検事役を演じ、②『サスペクト 哀しき容疑者』では、北朝鮮の工作員を追う韓国の対北情報局の要員を演じ、さらに、③『密偵』(16年) (『シネマ41』236頁) では、日本統治下の韓国で独立運動団体である「義烈団」を率いるカリスマのリーダー役を演じたパク・ヒスンが、本作ではまさに“スクリーンを圧倒する強烈な存在感”でリ・デボム役を演じているので、それに注目！

もっとも、脱北するだけでも大変なのに、韓国に入ってグァンイルを追い詰め、その復讐を果たすことなど可能な？当然そんな疑問が湧くし、本作中盤ではグァンイルを巡る警察のイドと国家情報院のジェヒョクとの競い合いがメインストーリーになるから、デボムの出番はなし。本作でデボムが再度登場してくるのは、イドがグァンイルの逮捕に警察

としてのプライドを懸けて臨み、上司から言われた通り「犯人を捕らえるためなら手段と法を無視し、暴力もいとわない」方針でやっていたにもかかわらず、結局途中でハシゴを外されて、失意のどん底に陥った時。そんな状況下でやっと、韓国の警察官と、北朝鮮から韓国に脱北した元工作員が手を結ぶタイミングが生まれたわけだ。

なるほど、なるほど。それはそれでよくわかる。しかし、そんなストーリー展開に見るパク・フンジョン監督の脚本は、ちょっと複雑すぎて詰め込みすぎかも・・・？

## ■□■結局C I Aの手の平で？いやいやC I Aも大失態！■□■

去る6月12日にシンガポールで実現した史上初の米朝首脳会談の功罪をどう評価するかは難しいが、お互いを「ロケットマン、チビでデブ」「老いぼれの狂人」と罵り合っていたトランプ大統領と金正恩委員長が笑顔で握手したのは、さすが2人とも千両役者だ。その実現までに米C I Aがどんな暗躍をし、どんな伏線を敷いたのかは知らないが、本作でゲンイルをV.I.P.な企画亡命者にしたのは、ポールたち。つまり、彼らこそ“秘密を握る者”なのだ。すると、韓国警察のイドがいかにも「違法捜査も辞さず」とゲンイルの逮捕に頑張っても、政治的な大局観からは、その上位には国家情報院がある。さらに、国際的な大局観からは、その上位に米C I Aがあるのは仕方なし・・・？

イドから何度殴られてもゲンイルがヘラヘラ笑っていたのは、自分が持っている張成沢の中国にある秘密の銀行口座の情報は、米C I Aにとってチョー貴重なものだという確信に基づくもの。そのため、いくらイドがゲンイルを追い詰めても、その都度ゲンイルは釈放されていたから、イドはいつもイライラ状態で、常にゲンイルの方が余裕の立場だった。唯一その立場が変わったのは、イドがゲンイルのサイコパスぶりを罵倒するについて、「お前は性的不能者だ！」と断定し、小馬鹿にしたこと。どうもそれが凶星だったようで、何を言われてもヘラヘラ笑っていたゲンイルもこれには激怒！その時はじめて、イドがゲンイルに対して一本取ったわけだが、そんなことは所詮イドの気休めにすぎない。本筋のストーリーでは、結局ゲンイルの身柄は警察から国家情報院へ、そして国家情報院から米C I Aに渡されていくことに・・・。

そうなれば、それまでゲンイルの身柄を巡って強烈な縄張り争いを繰り広げてきた韓国警察のイドも国家情報院のジェヒョクもお役御免だ。ところが、2人で静かにその「総括」をしていたところ、あっと驚く事態が発生！それは、一瞬のスキを見てC I Aの警備員の拳銃を奪ったゲンイルが、イドに対する復讐を遂げるべく、いきなり発砲したこと。これはイドと話していたジェヒョクの目の前で起きたことだが、一瞬のことであったため、ジェヒョクはもちろんポールも止めることはできなかった。こんな形でゲンイルから銃弾をあびたイドはとんだ“とぼっち”だし、C I Aは大失態だが、何発も銃弾をあびたイドの生死は・・・？

## ■□■生き残るのは誰？いいとこ取りするのは誰？■□■

4人の“修羅の獣たち”が「全員から追われる者」「捕えようとする者」「隠蔽しようとする者」「復讐しようとする者」という4つの立場に別れて戦い、そこに「秘密を握る者」として米CIAのポールが絡む「五つ巴の戦い」はメチャ面白い。しかし、クライマックスに向かって韓国警察のイドは瀕死の重傷を負わされたから、彼はこの戦いから脱落。しかし、その後はイドと組んでいた北朝鮮の工作員デボムが再登場し、一時はグアンイルを北朝鮮に連れ戻す小舟に確保するシークエンスも登場する。しかし、所詮一匹狼の脱北工作員と、ロイヤルファミリーの一員のグアンイルとでは、実力にハッキリした差異があることがスクリーン上で示される。すると、残された“修羅の獣たち”は、「隠蔽しようとする者」のジェヒョク1人だが、そこで冒頭のシークエンスが再びスクリーン上に登場し、ポールとの相談(?)を終えたジェヒョクがたった1人でビルの1室に乗り込み大活躍！しかして、そのターゲットは一体誰？

本作でジェヒョクを演じたチャン・ドンゴン(『ブラザーフッド』(04年)、『シネマ4』207頁)、『タイフーン/TYPHOON』(05年)、『シネマ10』72頁)、『マイウェイ 12,000キロの真実』(11年)、『シネマ28』86頁)等に出演した韓国を代表する俳優だが、『立く男』(14年)以来、久しぶりのスクリーンへの登場だ。

4月の文在寅大統領と金正恩委員長との「南北首脳会談」の時は、文在寅大統領が国際ニュースの主役になった。6月12日の米朝首脳会談以降、ニュースの主役はトランプ大統領と金正恩委員長に奪われたが、韓国内での文大統領の支持率は依然として高水準を保っている。それは、南北首脳会談と米朝首脳会談以降の南北朝鮮の統一や朝鮮戦争の終結、さらに朝鮮半島の非核化等への期待があるためだが、6月12日以降、金正恩は中国の習近平国家主席と密に連絡を取り、その後見的作用に期待していることがかなり不気味だ。国際政治にそんなこんな不安要素があるのは当然だが、2時間前後の映画ではそれなりの結末をつける必要がある。しかして、本作で生き残るのは誰？そして、いいとこ取りをするのは誰？それは、本作はパク・フンジョン監督が脚本を書いた韓国映画であり、韓国映画の全盛期を築いた最高の韓流スターたるチャン・ドンゴンが“修羅の獣たち”の1人として登場していることから明らかなはずだ。さあ、そんな顛末は、あなた自身の目でしっかりと！

2018(平成30)年6月26日記